

私の小さな美術論

桜井孝身

1999年3月4日9時4分

中央公論 1998年10月号、米国美術館のグローバル戦略、滝口範子からの引用と少々
の私の見解。

大見だしの前に白貫きで「迷走する日本の美術システム」とある。太文字でベルリン、ベニスのみならずスペインの小都市にも分館をオープンさせたグッゲンハイム美術館、ボストン美術館は来春、名古屋に進出する。いま、膨大な収蔵作品と企画力というハードとソフトを兼ね持った米国美術館の対外戦略が、美術館の新しいあり方を提示する。

「アーティストや美術評論家を含めたいわゆる美術界は世界の全人口と比べるととるに足りない数でしかありません。しかも彼らは批判をしても何ら手助けしてくれるわけではない」、「知的なチャレンジの舞台」だと強調し、目的は美術界からいい点をもらうことではなく、あくまで広く一般人を呼び寄せることだという視点を確固として示している。クレンズ館長によると、もし展覧会を入場料だけで賄おうとすると75ドル、実際には13ドル程度ですんでいるのは個人や企業からの寄付金、メンバーシップ、そうしてグローバル戦略から得た資金によるところが大きいのだ。アメリカのほとんどの美術館は私立財団によって運営されている。現在のアメリカの美術館の多くは長期的にみるといずれ財政的問題に直面するはずだ。美術館の目的が文化の物語で観客を魅了するという事です。と言い切る。つい最近の「ニューヨーク・タイムズ」紙は、資金調達があまりに難しいために美術館長は大変不人気な職業になっていて、現在全米で20ものポストがあいたままになっていると伝えている。もはや美術史の深い知識や美術館運営の経験などなくてもいいと、最近シカゴ近代美術館はユーロ・ディズニールランドの元社長を館長に雇い入れた。クレンズ館長は、現代の美術館を「新しい社会的コンセプトの生まれる場所」「世界観を変える場所」だと定義する。その一片は先の「オートバイの芸術展」でうかがわれた。パンツにチェーンをジャラジャラと付け、腕に入れ墨をしたアメリカ流暴走族が観客に混じっていたのも同じように圧巻だった。普通なら美術館では見かけない人々である。暴走族たちは、フリーウェイを飛ばして、この展覧会を見にきたというわけである。できるだけ多くの人々に来てもらいたいという試みは、「美術愛好者」という固まった社会を壊している。以上引用文。